

悪い、次の時間講義来れないから資料取っててくれ

こまぐるみすと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1 限毎に現れる『講義サボりたい衝動』。大抵はそれに打ち勝ち出席はするのだが、これはその衝動と言うか誘惑に負けてしまった学生の話である。彼は時に、次の講義までの90分、果てには取得単位と戦うことを強いられているのである。

気が向いたら2話以降も書きます。そうになると、大体フィクション、たまにノンフィクション、極稀にノンフィクションでお届けします。

目次

## 1 サボタージユ目

何度鳴ったか分からないアラームを切って時計を見る。あーダメだ、こりや間に合わない。一応出席を取られるわけでも必修と言う訳でもない講義なのだが、毎度資料が出る分下手にサボるのは避けたかった。いや、ホントに。マジでそう思ってるさ。

とは言っても別に急いで準備すればせいぜい数分の遅れで入室できるレベルだし、別にこれから準備して講義を受けようかとも考えてはいた。

どうすつかなあ……と、小さく呟く。もつともこれは一種のポーズであり、取るべき行動は決まっているのだが。過充電のスマホから充電器を抜いてLINEを開く。そして上から3番目にある友人宛に

『講義来れないから、次の文の資料俺の分も取っててくれんかね?』

とだけ送った。まあ良い席が取れるかどうかも分からない講義なんてなんかちよつと億劫だから仕方ないよね、と暴論を言い聞かせる。

一応親にサボりがばれるのも面倒なので、いつもよりは少し遅いとはいえそんなに遅くはない時間に家を出る。駅まで徒歩で行き、電車を待った。電車通学と言うのも億劫さを助長させている1つの要因である。

冬場特有の効きすぎた暖房の中での込み合った電車と言うのは中々の苦痛である。座れそうな席もなく、立った乗客は優先席をめぐるチキンレースを繰り広げていたが、とうとう自分の降りる駅までその席に誰も座ることはなかった。

30分くらい経って、最寄りの駅に着く。さて、ここから次の講義が始まるまでの1コマ分の時間をどう過ごそうか。幸いこの辺りは色々店もあるし、暇を潰すのにはそれなりに適している。

そういえば買いたいマンガがあったな……とふと思いつく。アニメを見てシンプルに原作も読んでみたいなあとか思ったりして。

駅を出てすぐの所に、ヲタ御用達のマンガだとかゲームだとかを多く売っている店がある。とりあえず今日はその古本屋で時間を潰すか。ついでに何か面白そうなのがあれば買うとしよう。

この手の店のやや淀んだ空気感は、長くいればそれほど居心地を悪く感じさせない。まあ慣れと言うのが多いかもしれないが。

さっさと見つけて時間が空けばまた別の所にも出向かうか。大学以外で——などと考えながら出版社のカードをあてにして探す。

なんとということでしょうか、そのマンガの出版社のスペースが取れだけ探してもない。あまり注意深く見ていないところがあつたが、そこは何かちよつと……アレ系の小説などがメインの所の近くなので結界を張られてるかのようにな自分を寄せ付けない。

とはいえ、逆に何のあてもなくダラダラと古本を見ているのは存外楽しいものである。自分の見たアニメの原作とかあれば気も惹かれるし、何よりこの自由な時間を自分が過ごしている間、同じ講義を取ってる奴等がクツソ面倒臭いグループ活動をさせられている、と言う事実が奇妙な優越感を与えてくれるのである。

……しかし、どれだけ探しても一番のお目当ては見つからない。色々見ている間に面白そうと思って買ったのはいくつかあるが、中々あきらめもつかない。気が付くとあと10分もすれば出ないと次の講義には間に合わない時間になっていた。相対性理論も真つ青の時間の経ち方である。普段が出不精な分、こういう時間を使って手に入れておきたかったのだが。

もうこれ以上は粘れないな……そう思つてふと顔を上げると、そこには間違いなく目当てのそれがあつた。件の結界の張られていたところである。時計はマジにギツリギリの時間をデジタルで示している。

急いでレジに持つていき、会計を済ませる……そういえばマンガを買つてることバレたら、アイツに自分がサボつたことバレルじゃん。そう思い、バッグの中にマンガを詰める。ヤバイ、買いすぎた。入んねえ。

最終的にはちよつと強引な形でバッグに詰めて何とか次の講義に

も間に合った。先に席を取って待っていると、連絡した友人が来た。

『ほい、これさっきの講義のレジメな』そう言って友人は自分にプリントを渡してくれた。『悪い悪い』と笑って返す。もちろん何食わぬ顔で。

少しして友人が『そういうええは何でさっきの時間来れんかったん?』と、尋ねて来る。大体こういう時の嘘についている時の返事は1つである。

『まあ……ちよつとあつてさ』。これを語尾を濁し気味に言えば、大抵の人は深くは突っ込めないのである。万能。